

秋に来るチョウ

根 来 尚

公園や庭でよく見かけるチョウに、ウラナミシジミ・ヒメアカタテハというチョウがいます。この2種類のチョウは秋になると急に目につくようになります。公園のマリーゴールドの黄色い花にやって来て花蜜を吸っている姿を見られた方も多いでしょう(図1,図2)。これらのチョウは、秋のみ成虫が現われる種類というわけではなく、暖かい地方へ行くと、春・夏にも成虫が見られます。ではなぜ富山では秋になると急に目につくようになるのでしょうか。

ウラナミシジミに関して言えば、成虫も幼虫も卵も寒さに対して弱く、また決まった越冬の形もなく、冬も暖かくエサ(エンドウ・ソラマメなど)のある所でしか冬をすごすことができません。日本の中では千葉県房総半島の南端部、静岡県伊豆半島、紀伊半島の南端部、四国の室戸岬や足摺岬、九州の大隅半島や薩摩半島あたりが冬ごしできる地域です。冬をこういった暖地ですごしたウラナミシジミは、春から夏と暖かくなるにつれて、何度も卵から幼虫・サナギ・成虫と発生をくりかえしながら、少しずつ北へ北へと発生地を広げてゆ

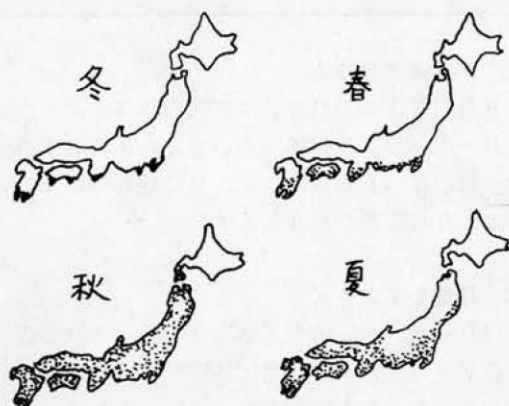


図3 ウラナミシジミの季節による分布の変化

きます(図3)。この分布の拡大は、梅雨前線にもなった低気圧などによる南風によって成虫が北方へ飛んでゆく(飛ばされてゆく?) ことによります。成虫が行き着いた所で卵を産み、それが成虫となってより北方へと移動してゆくわけです。こうして夏ごろには中国地方から東北地方の太平洋側まで広がり、秋になると本州全部、そして北海道にまで広がってゆくのです。

せっかく広がった発生地も冬になると、前述の地域を除いて、成虫もサナギも幼虫も卵も寒くなりまたエサが無くなることで全部死に絶えてしまいます。来年またやりなおしです。

こうして毎年、富山あたりでは秋になってからウラナミシジミが目につくようになるわけなのです。

ヒメアカタテハについても同じ様なサイクルがくりかえされているのではないかと考えられますが、まだ研究が進んでいませんので、くわしくはわかりません。どなたか研究してみませんか。



図1 ウラナミシジミ

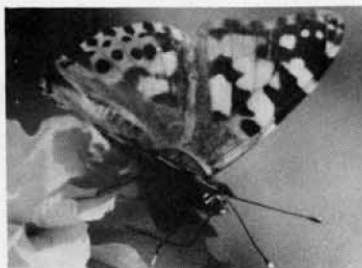


図2 ヒメアカタテハ

—入館者30万人突破—

昭和54年11月23日に開館して以来、さる8月1日に入館者が30万人を越えました。30万人目に入館された方は市内柳町にお住まいの島田博将君です。博将君はお兄さんとお父さんの3人で来られました。長井館長より30万人目の入館証明書とコガラの鳴き声入りの写真パネルが贈られました。

表紙によせて

この冊子が発行される10月1日は「中秋の名月」にあたります。月の模様と言えば、うさぎのもちつきを思い浮かべますが、世界各地では、かに・女の人の顔・ロバなどに見立てたようです。この写真から、そのような模様をじっくり思い浮かべて下さい。